

東院地区西北部の調査

—第381次

調査の概要

調査は2005年1月5日から開始した。調査面積は1050㎡。基本層序は整備による盛土、耕作土、橙褐色粘質土の地山となるが、西半は地山の上に中世以降の土器を含む遺物包含層が残る。奈良時代の遺構は地山面で検出した。東側の地山は橙灰色の粘質土であり、西にいくほど漸移的に礫が多くなる。

平城宮の東に張り出す東院地区の自然地形は、東側が北から宇奈多理神社にむかって南にのびる丘陵、西側は水上池からつづく谷地形である。1960年代以来、西辺を中心に発掘調査（第22北・43・104・128・270・292次）が継続的におこなわれてきた。現在、この谷筋に沿って東院庭園にむかう宮内道路が整備されている。今回の調査区は東から西にさがる緩傾斜面に位置し、遺構検出面のレベル差が調査区の東西で約1mある。しかし、第128次調査など西側の調査成果によると、遺構の残存状況は良好で、この高低差は奈良時代から存在したと考えられる。

周辺の調査成果

これまで東院地区については、園池を含む南側の発掘調査が先行的にすすめられた。その研究成果は2003年に『平城報告XV』として刊行され、また園池を中心とする「東院庭園」の復原整備がすでに竣工している。

文献史料には、奈良時代後半になると「東宮」ないし「東院」は、儀式や叙位がとりおこなわれた場所として、しばしば登場するようになる。しかし、このような儀礼の舞台となった中枢部分の実態は明らかでないのが現状である。

今回の調査区は、南は第292次、西は第128次および第22次（南）に接する。西側の第128次および第22次（南）の調査では、雑舎や厨と推定される数多くの建物や大型の井戸SE9600など、東院に付属する諸施設の存在が明らかとなった。さらに、1999年度の第292次調査では、一連の大規模な掘立柱建物SB17800、SB17810、SB17820が見つかった。とくにSB17800とSB17810は総柱であり、高床の構造が考えられることなどから、「楼閣宮殿」と想定された。今回の調査は、この全容を把握し、西側の遺構群との関係を明らかにすることを目的とした。

今回の調査成果

今回の調査では、4期にわたる遺構変遷を確認した。各遺構の解釈および周辺の調査成果との整合性については、さらに詳細な検討が必要であるが、検出した主な遺構について概説する。

まず、南側の第292次調査（1999年度）で見つかった総柱の掘立柱建物SB17800が、当時の所見よりも北に2間分のび、梁行6間、桁行6間の正方形の平面プランをとることがわかった。さらに北側に、同規模かそれ以上の規模の掘立柱建物が並ぶことも明らかとなった。SB17800との距離は20尺で、SB17800とSB17810の間隔と同じであり、柱筋もほぼ通ることから一連の建物と判断される。

また、今回の調査では、先行する建物を確認した。柱穴の重複関係から明らかな遺構変遷は、8間以上×2間の南北棟の側柱建物→3間×2間の東西棟の総柱建物→8間×4間の東西棟の総柱建物→6間以上×6間の総柱建物である。これらはいずれも柱間寸法が10尺等間で設計されている。とくに総柱建物のうち、新しい2時期のものは、平城宮内でもきわめて大規模な部類に属する。

これら特異な遺構群の性格を明らかにするには、周辺地区の従来の調査成果とあわせて、今後検討しなければならない。さらに東院地区の中枢部分の発掘調査をすすめることによって、東院地区の全体像を把握する必要がある。（神野 恵）

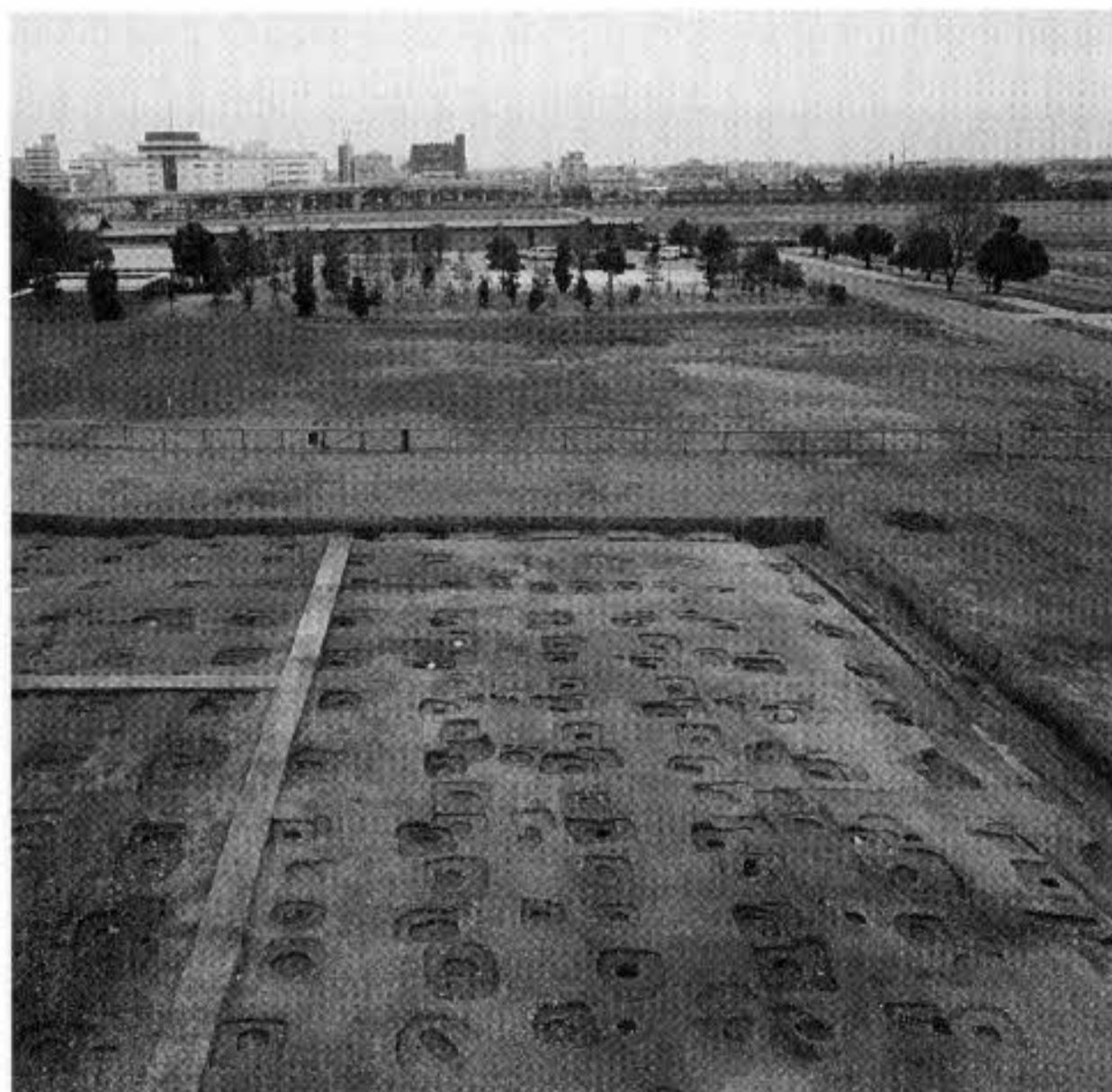


図139 第381次調査区西半の検出状況（北から）